

# 学位論文内容の要旨

愛知学院大学

論文提出者

相原 喜子

論文題目

口蓋裂言語に対する一般人の認知に関する研究

—終助詞表現の発話者印象への影響—

## I. 緒言

口蓋裂による言語障害は、患児に強い心理社会的影響を与えると考えられており、人格形成や社会性の発達に重要な時期である幼児期や学童期に、口蓋裂児の心理的負担をいかに軽減できるかが重要な課題である。

当研究室の早川は、終助詞の挿入や発話速度の調整により、口蓋裂による言語障害に対する否定的な印象を改善しうる可能性を示唆し、この研究成果を踏まえ、牧野は、口蓋裂の言語障害に対し、発話速度を調整することにより印象を改善し得ることを証明し、発話速度の言語指導の有用性を報告した。申請者は、終助詞に着目し、予備研究により、健常児の音声において終助詞の付加により発話者印象は好意的で親しみやすい印象を与えることを明らかにした。口蓋裂の言語障害においても、終助詞の付加による発話者印象の改善の可能性を検討し、口蓋裂児のコミュニケーション能力を向上させるための新たな言語訓練方法を構築する上での基礎資料を得ることを目的に、口蓋裂の言語障害において、終助詞表現が発話者印象にどのような影響を与えるのか、いかなる要因が影響を与えるのかを検討した。

## II. 対象および方法

### 1. 対象音声

愛知学院大学歯学部附属病院口唇口蓋裂センターに通院する口蓋裂術後で、呼気鼻漏出による子音の歪み (Nasal Emission : 以下 NE)、鼻咽腔閉鎖

機能評価は「不全」、NEの重症度は「中等度」の言語障害を有する10歳児とした。

## 2. 発話文

予備研究を元に、終助詞が発話者印象へ影響し得ることが明らかであった6つの発話場面（依頼、準命令、認識、評価、勧誘、希望）とそれらの発話場面に忠実な11の基本文、「テレビをつけて」「消しゴム貸して」「早くして」「きょうは少し寒い」「雨が降ってきた」「いつもより早く着きそうだ」「お医者さんに行ったほうがいい」「日曜日に遊ぼう」「昼休みに行ってみよう」「プールへ行きたい」「ご飯を食べたい」を設定した。付加する終助詞は、先行研究により、会話の中で高頻度に使用され、低年齢から獲得され、なおかつ終助詞の発話行為が社会的相互作用と関係し、発話行為が聞き手の共感獲得効果をもたらすことが報告されている“ね”と“よ”を選定した。

## 3. 聴取者

口蓋裂の言語障害に関する知識ならびに聴力障害を有さないボランティア学生200名（男性100名 平均年齢 $21.19 \pm 2.64$ 歳、女性100名 平均年齢 $19.71 \pm 1.62$ 歳）によって行った。有効回答率は100%であった。

## 4. 調査方法

対象音声の提示は各発話文3回とした。早川の研究に従い、発話文ごとにSD法（7件法）を用い、16の発話者印象の評価項目に対し評価を求めた。

評価項目は、「魅力的—魅力的でない」「内向的—外交的」「不安げ—自信がある」「友好的—闘争的」「知性的—知性的でない」「活発—不活発」「可愛らしい—可愛らしくない」「積極的—消極的」「優しい—優しくない」「繊細—粗野」「感じの良い—感じの悪い」「親しみやすい—親しみにくい」「礼儀正しい—無礼な」「開放的—閉鎖的」「明るい—暗い」「違和感を覚える—違和感を覚えない」であった。

## 5. 分析方法

早川の方法に準じて印象評価項目について因子分析を行い、2要因反復測定デザイン分散分析による発話者印象の要因分析を行った。その後、反復測定デザイン分散分析により、発話者印象を規定する要因の主効果と交互作用の有無の検討をおこなった。統計解析には SAS Institute Japan 株式会社の統計解析ソフト SAS<sup>®</sup> 9.4 (東京) を用いた。

本研究は、愛知学院大学歯学部歯学研究科倫理委員会の審査を受け、承認 (承認番号 332) を得た上で実施した。

## III. 結果

### 1. 「発話者印象」の因子分析

主因子法による因子分析の結果、「内向的—外交的」、「不安げ—自信がある」、「違和感を覚える—違和感を覚えない」はどの因子にも関連が弱く、また、「開放的—閉鎖的」、「明るい—暗い」の因子負荷量がかなり高かった。これらの問題点を解消するために斜交因子解による再検討が必要であると

考えられた。

## 2. 「発話者印象」の16項目のデータの斜交因子解による再検討

2因子が抽出され、第1因子は「親和性因子」、第2因子は、「活動性因子」と命名した。2因子間の相関係数の推定値は0.438であった。クロンバックの $\alpha$ 係数は、第1因子、第2因子の順に、0.899、0.868であった。

## 3. 2要因反復測定デザイン分散分析による発話者印象の要因分析

### 1) 第1因子(親和性)の因子得点を従属変数とした場合の分散分析

発話文要因の主効果、終助詞要因の主効果、および2要因の交互作用効果はすべて有意であった。

### 2) 第2因子(活動性)の因子得点を従属変数とした場合の分散分析

発話文要因の主効果、終助詞要因の主効果、および2要因の交互作用効果はすべて有意であった。

## 4. 規定因の発話者印象に対する総合的な効果の有無の検討

### 1) 第1因子(親和性)の因子得点を従属変数とした場合の分散分析結果

発話場面要因の主効果、終助詞要因の主効果、および2要因の交互作用はすべて有意であった。各要因の主効果の多重比較の結果、発話場面、終助詞要因ともに有意であった。

発話場面要因と終助詞要因の交互作用の多重比較の結果、とりわけ、“ね”において、発話場面が「依頼」であっても「準命令」であっても親和性は相対的に高いが、“終助詞なし”は「依頼」では親和性は高くなるのに対

して「準命令」では低いことが明らかであった。終助詞のない「依頼」「認識」での親和性は共に高いが、“よ”の親和性は、「認識」では高いが「依頼」では低いことが明らかであった。終助詞のない「依頼」、「勧誘」での親和性は共に高いが、“よ”の場合の2つの発話場面の親和性は、「勧誘」に関する発話場面のそれは相対的に高いが「依頼」に関する発話場面のそれは相対的に低いことが明らかであった。

2) 第2因子(活動性因子)の因子得点を従属変数とした場合の分散分析結果

発話場面要因の主効果、終助詞要因の主効果、および2要因の交互作用はすべて有意であった。発話場面要因の主効果の多重比較の結果、「準命令」と「認識」、「準命令」と「評価」、「認識」と「勧誘」、「評価」と「勧誘」、及び「勧誘」と「希望」間の対比のみ有意であった。終助詞要因の主効果の多重比較の結果、“終助詞なし”と“よ”の対比以外は有意であった。発話場面要因と終助詞要因の交互作用の多重比較の結果、とりわけ、“ね”において、「準命令」で活動性は高いが、「評価」では活動性は低いことが明らかであった。“よ”における活動性は、「準命令」でも「評価」でもほぼ同じぐらい低いことが明らかになった。

#### IV. 考察

##### 1. 口蓋裂と言語障害

NE 音声の発話者に抱く印象には、発話者のパーソナリティや態度に対する印象が含まれていることが明らかとなった。言語訓練の途中や言語訓練を行っても完全には正常構音を得られない状態でコミュニケーションの問題を持つ患児に対し、心理社会的問題を回避、解決するためには、従来の長い時間をかけ正常構音を目指した訓練方法に加え、新たな視点と広い視野に立ち、即効性のある終助詞を付加した新たな訓練方法を開発しなければならないと考えられた。

## 2. 口蓋裂における心理社会的問題

口蓋裂における言語訓練は長期に渡り、その期間は患児の自我、情緒、社会性などの内面の発達により人格が形成される時期である。口蓋裂児の言語障害に対する否定的な発話者印象を改善することは、他者からの評価を高めることにつながり、その副次的効果として自尊感情の向上をはかるものであり、心理社会的問題の解決や予防につながる。したがって、口蓋裂児の言語障害において、印象改善のための多面的な訓練方法を構築することが必要であると考えられた。

## 3. NE 音声における発話者印象の因子分析と要因分析

口蓋裂児の言語障害の代表例である NE 音声の発話者印象の因子分析の結果、2 因子が抽出された。第一因子は「親和性因子」とし、発話者の好感度に関わる因子、第二因子は「活動性因子」とし、発話者の心的態度に関わる因子と考えられた。また、口蓋裂児の音声と健常児の音声の発話者印象



の異質性が明らかになった。

発話者印象の各因子に対して、「終助詞」「発話文」それぞれが、高い水準で発話者印象に対して何らかの影響を及ぼしていることが明らかになった。また、「終助詞」と「発話文」の組み合わせ特有の効果も、発話者印象に影響を及ぼしていることが明らかになった。

#### 4. 規定因の発話者印象に対する総合的な効果

全体的には「準命令」の発話場面は親和性が低く、活動性が高かった。また、「依頼」、「勧誘」の発話場面も活動性が高く、終助詞については、“ね”が親和性、活動性ともに最も高かった。さらに、「準命令」が他の場面に比べて際立って親和性が低く、「依頼」、「準命令」、「勧誘」が他の場面に比べて活動性が高いことが明らかになった。また、親和性については、“ね”が最も高く、“終助詞なし”と“よ”はそれは低い。活動性については、“ね”が最も高く、“終助詞なし”と“よ”のそれは低いことが明らかになった。交互作用の多重比較に結果から、とりわけ、親和性には、「依頼」の場面では、“ね”と“終助詞なし”が、「準命令」の場面では、“ね”が有効的に働き、活動性には、「準命令」の場面で、“ね”が有効的に働くことが明らかになった。一方で、「準命令」の場面での“終助詞なし”の親和性は大変低く、“よ”「準命令」と「評価」の場面での「評価」においても活動性は低い。これらのことから、終助詞と発話場面の発話者印象に対する総合的な効果が明らかになり、口蓋裂児の言語障害に対する印象改善



のための言語訓練に使用しうると考えられた。

#### V. 結論

終助詞の付加により発話者印象が改善されることが明らかになり、口蓋裂児の言語障害の発話者印象改善のための新たな訓練方法へ、終助詞表現を導入することの意義が示された。